

行雲舎の本棚から その4

こんにちは。図書室のある古民家ゲストハウス・行雲舎です。約2000冊が並ぶ本棚から、気になる本やお勧めの本を紹介します。

前回の「モモ」に続いて、ドイツ人作家ミヒャエル・エンデの絵詩集「影の縫製機」を取り上げます。この本は、約40年前にドイツで刊行され、日本では一度出版されたものの、長く絶版になっていました。昨年秋、偶然、サウザンブックス社から復刊されることを知り、クラウド・ファンディングで手に入れた一冊です。

『影の縫製機』ミヒャエル・エンデ著

真っ黒な布に縫製機（ミシン）が刻印されたシンプルでおしゃれな装丁です。箱にはシルバーの帯がかかり、本のタイトルと「ミヒャエル・エンデの詩がビネッテ・シュレーダーの絵と響きあう絵詩集」という副題、シュレーダーの縫製機の絵が印され、外観もシンプルで美しく、中身への期待が高まります。

扉を開けると、シュレーダーのモノトーンの線描画で、カメが描かれています。思わず、「モモ」にも登場するカメを想像してしまいます。エンデの詩とそれに合わせたシュレーダーの絵も独創的で空想の世界を浮遊するイメージで、その内容も「モモ」に通じるかもしれません。

本書の内容（要約）

19編のエンデの詩と、各詩に合わせたシュレーダーのモノトーンの精密な線画が収められています。冒頭の「本当の林檎」は、タイトル「ジャック・プレヴェールへのオマージュ」と記され、あるがままに書こうと決意した文士が林檎ひとつを表現するのも難しいと悟ったことを詩でつづっています。頭が羽の紳士と大きな林檎を描いたシュレーダーの絵も印象的です。

面白いのは、「摩訶不思議なる生き物」。「俳句 宮中女官キク子の旅日記から 江戸時代」という副題があり、蛇の体の女性が海で泳ぐ絵が添えられています。エンデは日本の俳句と縁があったのでしょうか？

短く、リズムカルな言葉の中に、エンデの幻想的な世界観や鋭い人間観を見ることが出来ます。最後にくすっと笑わせてくれたり、何回読んでも首をひねったりといった詩もあり、じっくりと味わえます。シュレーダーの絵の中に、「ENDE」の文字を見つけるのも、遊び心を満たしてくれます。

印象に残った一節

「透明人間」の中から。

ここでひとつ 子どもにもわかるだいじなことを書いておこう

愛してくれる人には感謝しよう

愛をあたえる人になろう

読後の感想

「詩は難解」というイメージがあり、深く味わう機会はあまりありませんでした。この「影の縫製機」は、シンプルで美しい装丁やシュレーダーの絵の美しさも相まって、楽しみながら向き合うことができました。エンデは、「モモ」を通して、時間に追われてゆとりを失った人間への警告を発しましたが、この絵詩集でも、人間らしさや生き方に対するエンデの哲学、信条が伝わってきました。

この本とは、偶然、クラウド・ファンディング募集を知り、出会うことができましたが、素晴らしい本を手にとることができ、嬉しく思っています。

行雲舎も、本との出会いを大切にする場として育てていきたいと思っています。

2026年7月 行雲舎

